

解 説



『田口玄一論説集』による品質工学の学び直し

Relearning of Quality Engineering by Genichi Taguchi Collections of Articles

佐々木 市郎*

Ichiro Sasaki

1. はじめに

2011年から2014年にかけ、『田口玄一論説集』全4巻^{1)~4)}が刊行された。各巻とも500から600ページに及ぶ大部であり、編集作業は相当な困難を伴うものであったと推察される。関係各位の熱意と努力のたまものであり敬意を表する。

本論説集は長きにわたって「標準化と品質管理」誌に掲載された論説のうち、単行本化されていない部分を整理したものとされている。ならば残り物を集めたものかと言えば、そのようなことは全くない。重要なことは繰り返し語られるのであり、これら論説集の中に品質工学の重要事項が網羅されている。正に宝の山である。

それが結論だけでなく、そこに至る背景や考え方が詳しく述べられている。一見回りくどいことかもしれないが、それをトレースすることで読む側の理解の度合いが一段高まることは確かである。

本稿の標題とした「学び直し」とは、一般的には社会人が学校教育で学ぶ内容を勉強し直すようなことを指す。学生時代には十分理解できなかったこと、あるいは時間が経つとともに忘れてしまったことを、その後に積んだ社会経験を基にして再び学べば、単なる知識の習得ということだけでなく、見える世界が変わってくることも期待される。品質工学の場合でも、座学中心の駆け出しの頃に比べれば、社内外の事例に接し相応に経験を積んだ上であらためて学べば、更なるステップアップが期待できる。筆者にとって、そういうタイミングでの本論説集の発刊であった。

実験データを基に少々計算ができるくらいでは

かったことにはならない。あらためてそのことに気づかされたし、忘れかけていたことを思い出すことも多かった。逆にますますわからなくなったこともあるが、それは今まで理解したつもりになっていたことが、実はそうではなかったということである。

本論説集の冒頭で矢野宏は、「現在品質工学として多くの人が理解していることと、田口博士の主張には大きなへだたりがあり、それを埋めることも論説集の役割である」と述べている⁵⁾。また矢野は原典に当たることの重要性をいつも訴えている。その原典が数多く集まっているのがこの論説集である。

本稿は筆者の理解度による個人事情という面もあるが、できるだけ共通課題として広く議論できると考えた内容を取り上げる。昨今の品質工学の世界や研究事例の動向と対比させながら考察する。

品質工学に関わる多くの人が、知識の整理や新たな習得のみならず、今の自身の立ち位置や今後の方向性についてあらためて問い直してみるきっかけになればと考える。

2. 論点の整理

学び直したことは数多いが、本稿では以下の5つの項目を取り上げる。

- (1) 直交表
- (2) SN比
- (3) 損失関数
- (4) 品質管理手法(統計的手法)との対比
- (5) 命の値段

まず(1)から(3)の3つは、技術に対するマネジメント用の汎用ツールと位置づけられている⁶⁾。(1)については直交表そのものというより、それを使う目的をあらためて考えてみる。(2)は評価対象アイ

* アルプス電気(株)